

シュヴァルツ (Schwarz) ——

ビーアマン (Biermann) —— ブレヒト (Brecht)

『龍』 (Der Drache) と『ドラ＝ドラ』 (Der Dra-Dra) と『もしサメが人間であれば』  
(Wenn die Haiische Menschen wären) に基づいて

楠 根 重 和

まず最初にあまり知られていないヴォルフ・ビーアマン (Wolf Biermann) の経歴を略記して、以下の論文の理解に役立たせてみたい。彼は一九三六年ハンブルクに生まれる。共産主義者であった父はアウシュビッツの強制収容所で殺害される。一九五三年一七歳の時、共産主義の正しさを確信し、新しい社会建設に参加するため、多くの人々が東から西へ逃亡するのは逆に、東ドイツをよりよい半分として東独へ移住した。そこで政治学、経済学、哲学を学ぶ。その後ベルリーナ・アンサンブルで演出助手として活躍。一九六三年までは自ら創設したベルリン勤労学生劇場を指導した。この間、弾き語り (Liedermacher) として、政治色の濃いソングやバラードを作詩作曲した。一九六五年以後彼は聴衆の前に立つことも、レコードを作ることも、歌詞を活字にすることも東独当局によって禁止される。反体制のレッテルを貼られたのである。東側で弾圧された芸術家が西側では称讃されるというシーソーゲームよろしく、ビーア

マンの歌は西側のラジオやレコードを通じて流行し、逆にそれがアンダーグラウンドの形で東側にも広がっていった。もっとも西独でのビーアマンの受容といっても、大学生を中心とする Subkultur の領域を越えることはなかった。一九七六年九月に一年ぶりで禁解かれ、礼拝の一部という名目で、教会の中ではあったが演奏することが許された。けれども二ヶ月後の十一月一日に彼がケルンに演奏旅行のために東独を離れた隙に、市民権が剥奪され、再入国が許されず、現在はそのまゝハンブルクの母の元に住んでいる。左派の一人であるビーアマンと、国境線では限定することができない団体である教会との結合を当局が恐れたというのがその原因であるという見方が西側ではなされている。

ヴォルフ・ビーアマンの『ドラ＝ドラ』はロシアの劇作家イェフゲニ・シュヴァルツ (Jewgenij Schwarz) (一八九六—一九五八) の

『龍』の改作である。『ドラ＝ドラ』を理解するために『龍』との関係をまず考察してみたい。この意味で『龍』と『ドラ＝ドラ』の文学史を覗いてみることにする。

一九三九—四三年 シュヴァルツはレーニングラードの喜劇劇場のために『龍』に三九年着手、四三年完成。けれどもヒットラーのレーニングラード侵攻により、この劇団はモスクワに移動したためにシュヴァルツの計画は実現しなかった。このメーヘルヒエンコメーディエはソ連にとってやゝもすれば *peinliche Interpretation* をもたらずので、ソ連では上演禁止になる。

一九六一年 ポーランドで『龍』の初演。

一九六二年 『龍』がシュトゥットガルトから出版される。訳者ベーター・パリチュ (Peter Palitzsch)。

一九六五年 東ベルリンのドイツ劇場においてベンノ・ベッソン (Benno Besson) により『龍』が上演される。ビーアマンもこの企画に参加していたが、二人の間に亀裂が入って、ベッソンの独り舞台になってしまふ。この上演は東ドイツ当局から批判されたので、ベッソンは主人公のランツェロット (Lanzelot) に作業服を着せ、労働者との連帯を強調する形で登場させた。けれどもこういった干渉の結果、この演劇の持つ社会主義体制批判の矛先が鈍り、メーヘルヒエンになっ

てしまったという。

一九六八年 ベッソンとは独立して『龍』の改作を続けていたビーアマンは『ドラ＝ドラ』として完成させる。一九六八年のミュンヘンのカムマーシュピールにおいて、『ドラ＝ドラ』が初演される。資本主義国家である西ドイツにも龍の末裔がいるとして、西ドイツの著名な政治家や人物の写真を掲げ、これらがそれであるとしたり。社

会主義批判として生じた演劇が、同様に資本主義体制批判にもなった。官僚主義と管理社会による大衆の圧迫という点では区別はないわけである。西ドイツでもこの劇は同様に物議をかもし、先鋭的な箇所はセリフから削除され、演劇顧問のハイナ・キップハルト (Heiner Kipphardt) とヘンス＝ギンター・ハイメ (Hans-günther Heyme) の両氏はこの仕事から降ろされた。

一九七八年 シュヴァルツの『龍』が第三二回ルーシュビールレ八のおりに、レックリングハウゼンで西ドイツで初めて上演される。このヴォルフ・ゼーゼマン (Wolf Seesemann) による上演はルーシュビールレのスローガン「人権擁護参加」に基づいている。カーター大統領の外交戦術の一つである人権外交に呼応した西側の文化的東方政策の一つと思われる。この上演にあたって訳された本には、スキャンダルになったビーアマンの『ドラ＝ドラ』が意識されていることは「親愛なドラ＝ドラ」という言葉が何度も飛び出してくることからわかる。この論文での『龍』の研究にはこの上演にあたって訳された本が下敷きになっている。

龍はヨーロッパはいかに及ばず、北アフリカ、中東、インド、東アジア、またアメリカインディアンにも知られている人類史上稀な広がりを持った空想上の動物である。もちろんその形態と意味するところは時代や国、あるいは地方によって異なることはいまでもない。例えば現在私たちが知っている龍は後漢の頃に確立したといわれている。いわゆる三停九似の説がそれで、宗羅願撰の爾雅翼卷二の一八には次のような言葉が見い出される。

世俗畫龍之狀、馬首蛇尾、又有三停九似之說、謂自首至膊、膊至



腰、腰至尾、皆相停也、九似者角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蟹、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛、……<sup>17)</sup>

これによれば動物の体の優れた部分の寄せ集めで龍が成立しているのがわかる。この考えが日本に入って日本人の感覚に合うように変化を遂げ、江戸時代に完成するのである。

龍のルーツを追求することは困難で、笹間氏の論文や『ドイツ迷信の簡易辞典』(Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens)においては、古代人がかつて爬虫類と一緒に生活していた時の恐竜に対する恐怖の残存や、あるいはそれに結びつくような自然現象から来ているという説が述べられているが、他にワニ説や蛇説や、また純粹な自然現象説などがある。またその起源がある特定の地域で発生して各地に拡散したのか、それとも全く無関係に各地で独立発生したのかを断定することはできない。いずれにせよ、そのようにして生まれた龍は拡散し、あるいは統合し、互いに補い合って現在の形態になったと思われる。これは私見であるが、旧約聖書での蛇やレヴィアータンは旧約聖書のどの箇所を見ても、せいぜい飛ぶことのできる蛇であったり、巨大な海蛇(もしくはワニ)でしかない。それが新約聖書ではずっと具体的に描写され、特にヨハネの黙示録においては、龍は七つの頭と十の角を持つにいたっている。この形態の変化、とりわけ角の有無は、この間に中国の龍思想が導入されたと考えてみたらどうであろうか。

東洋と西洋の龍の根本的な違いは、大雑把に言って前者が正義を代表することが多いのに反して、後者は邪悪を意味することが多いという点にある。どうして東洋で龍が正義として解されているかといえは、仏教と五行説にその理由がある。悪事を働いた人間が龍に

変身し、他の人に危害を加えていたところ、法師に出会って改心し、教化されて仏法の守護者になったという龍王伝説。またヴェーダにおける龍は Vritra と呼ばれ水の支配者とされている。中国でも雨乞いの時に土で龍を作って、天の龍に祈る儀式があった。アジアの農耕民族にとって水を支配する龍は畏れ多い存在に違いない。また五行説によると北の方位を支配する神は玄武といわれて龍の形態をしており、古墳の玄室の北壁に龍の絵が描かれているのが最近山陰で発見されたと報道されたが、これも五行説の影響である。こういった考えが朝鮮を経て、あるいは直接日本に入ってきたので、龍は有難い動物ということになっている。一方西洋における龍がネガティブなのは主として聖書やエジプト、ギリシア、バビロニアの神話によっている。聖書における龍はレヴィアータンと呼ばれ、神の敵対者で神に殺されることになっていた。ヨハネの黙示録では墮落天使はサタンとなり、それはイブを唆かし人間を罪深い生き物とした蛇であり、そしてそれはまた龍であったことがはっきり書かれている。それゆえに龍退治は悪、すなわちサタンに打ち勝つことと解釈され、キリスト教、特にカトリックでは非常に好まれるモチーフとなった。聖ゲオルクは馬に跨って龍を串刺しにする絵で有名であるが、この好例である。またバビロニア神話では最高神マルドゥクは原始混沌を意味する龍の形をした、ティアマトを征服し、世界に秩序をもたらしたとされる。またエジプト神話では死を司るワニの形をした怪物は悪と冥界の支配者であった。ギリシア神話では数多くの英雄達が龍を征服し、王女を救出したり、宝物を手に入れたりしている。この最後に述べた英雄伝説がゲルマン民族に入って、ジークフリート、ベールオウルフ、デイトリヒ、トリスタンなどの有名な

龍退治の専門家を生む。龍という空想上の怪物に対して東洋と西洋において、どうして正反對の態度をとってきたかについて、民族学の研究者森氏は興味深い見解を述べている。

アジアの東の方では、自然の万物の中に神を見たのに対し、西の方は唯一絶対の神がすべての自然を創造したものであるから、神はたゞ一つであり、その他はすべてその創造物であり、神を超えるものはない。したがって神と力を比べるような超能力者、あるいは自然を破壊する風雨のような破壊者は、神の国をこわす悪の方に見做されることになる。

西洋における一般的にネガティブな龍の考えから発生した王女救出説話や大蛇退治説話は世界の至るところで見られる説話である。トンプソン (Thompson) によれば「龍退治の話は現在約一〇〇〇の実例が知られ、なお続けて新しいものが採録されている」という。彼に先だつてこのモチーフに注目したランケ (Ranke) は何百何千と世界中で散見される怪物退治の原型を追求し、『龍退治』と『二人兄弟』の二つがどうもそれらしいと結論づけ、しかも後者も前者に基づいていると断定した。この原型の大意はこうである。

兄妹がいて、親の死後、兄の方は三匹の羊を、妹の方は家を相続する。兄は旅に出て、途中で三匹の羊を三匹の不思議な犬と交換する。またあるところで老人を助け、不思議な剣(もしくは杖)をもらう。山に棲む七頭の龍の生け贄の籤に王女が当たったので悲しみの黒い布を垂らしている町にさしかゝる。王は王女を救出する者には国の半分と王女をその者に委ねると約束する。若者は魔法の剣で龍と戦い、頭を切り落とし、龍の七つの口から舌を切り取る。この戦いの時に三匹の犬も若者を助ける。龍を退治したことについては自

分が帰ってくるまで誰にも告げないように王女に約束させ、切り取った舌をポケットに入れて若者は再会を期して旅を続ける。ところが王女を龍の棲む山まで運んだ馭者が一部始終を見ていて、龍の頭を持ち帰り、自分こそは龍を退治したのだと嘘をつき、王女と結婚しようとする。仕方なく王女は若者との再会の日を結婚式の日と決める。結婚式の日には若者が帰ってきて、切り取った舌が龍の口に合うのでこの若者が本当の英雄であつたと知れる。そして馭者は罰せられ、若者と王女は結婚する。

ランケは『龍退治』の起源は西ヨーロッパにあつて、西ヨーロッパから離れるに従つて変化が激しくなると主張した。トンプソンはもっと限定してフランスにその起源があるとしている。

世界各国における『龍退治』と『二人兄弟』の分布をトンプソンは一覧表にしている。わが日本にも『龍退治』の話として素戔鳴尊が八岐の大蛇を退治して、櫛稲田姫と結婚するあの有名な話が収められている。ギリシア神話においてもベルセウスがカシオペアの娘アンドロメダを悪龍から救出して結婚する話もあり、こういったヨーロッパ起源の説話がシルクロードを通じて、日本にまでもたらされたという可能性も完全には否定できない。

ドイツではこの龍のモチーフを持った『龍退治』は五七の話が、また『二人兄弟』は六一の話が先に挙げたトンプソンの一覧表には掲げられている。このような伝統の上にシュヴァルツの『龍』もビーアマンの『ドラッドラ』も立っている。シュヴァルツの作品における騎士ランツェロットが龍に戦いを挑むというのはギリシア・ゲルマンの英雄伝説の影響を示しており、またビーアマンのいう心の龍を殺すというのは宗教的な比喩である可能性もあるし、龍の征



服後、真の秩序建設が可能になるというのは、神によるサタン勝利というキリスト教の考えが色濃く入っていると考えられる。またノミや南京虫が龍退治を手伝うというのはピーアマンの発明であらうが、楚辞の「一巻の惜誓」には「神龍失水而陸居兮、為螻蟻之所裁」という言葉があって、超能力を持った龍でも、おけらや蟻のようなつまらない小動物にも負かされることがあるがいわれているが、全くの偶然だとしても面白い事実である。

次に『龍』と『ドラードラ』の比較を論ずることにする。両方とも大筋では英雄が龍を退治して娘を救出したが、かつて龍の側に仕えていたものが龍の権力を手中におさめて、元の木阿弥になってしまい、そこで英雄が再度登場して新たな龍を排除して、娘と結婚し目出度しのメールヒエンとなっている。けれども詳細に分析してみると、そこにはシュヴァルツとピーアマンが当時これらの作品を書いた時代の差や二人の階級意識の差や演劇手法の違いがあることがわかる。

シュヴァルツの『龍』にあつては、龍とそれに与する一部の特権階級が一方に、もう一方に市民があるという二層構造になっているところがピーアマンの作品は市民の階級的身分的職業的差異がずっと分化して多層で、また知識人と非知識人の区別も明確になっている。またその下に市民にも虐げられている動物がいる。そこでは龍—人間—動物の関係、すなわち搾取者—中間搾取者—被搾取者の関係がより明瞭に示されている。また被搾取者を代表する動物の中にも互いに反目がある。例えば皆んなから蔑まれており、失なう物を何一つも持たない豚が最も先鋭的で革命的で、社会システムの中で

の龍の根深さを知っているとされる。ドラードラを退治して安心して、もはや戦いを続行しようとしないう英雄フォルクに対して豚は次のようにいう。

お前は人間をあまり知らないな。

しかも新しい別の龍が生まれてくることを見抜いて次のようにいう。

古い龍がまだ温かい内に、新しい龍がもう俺たちを冷たくさせる。シュヴァルツの『龍』が古典的伝統に依存しながらも第二次世界大戦中の産物であることはいろいろなところから読み取れる。例えば市長が龍に対して「ハイル・龍」という時、読者はハイル・ヒットラーを感じる。また龍はすべてが手短かに「軍隊方式」でいくことを好むという。それに龍が人間に変身した時に「ブロンドの男」になるのだが、ブロンドという髪の色が強くゲルマン人を連想させる。また「戦争そのものが俺なんだ」という龍の言葉もファシスト、ヒットラーを思い起こさせる。またジブシー狩りの話も放浪民族であるユダヤ人狩りと考えられる。龍はドイツ・ファシズムであり、龍にとって代って権力の座についた市長と息子のハインリヒはスターリニストたちであり、その下に常に支配される市民たちがいるというのは、まさに当時のレーニングラードの社会そのものである。けれどもファシズムを代表する龍と、その死後龍の末裔である一部の階層、こゝでは市長とハインリヒを取り除けば町に平和と自由が来るというのでは、中産階級の分析が足りない。それに反してピーアマンの場合には中間搾取階級を意味する人間、官僚たちを徹底的に排除しなければ革命は生じないとしている。ノミに代表される「バルチザン兵」によるゲリラ戦法やフォルクが時々引用する教典「龍退

治のための手引書」には中国型の共産主義が下敷きにあると考えられる。例えばいま触れた「手引書」の中の次のような言葉、

敵の力の過大評価と民衆の力の過小評価が表現されているような見解は全部誤りである。

は毛沢東選集の第四巻の中の次のような言葉

敵の強さを過大評価し、また革命的な力の強さを過小評価するのは一つの非常に重大な誤りであろう。

と偶然に似ているだけであろうか。また中国共産主義革命に対する共感、ビーマンの反官僚主義思想と切り離しては考えられない。彼の龍退治は主として官僚主義退治を念頭においていたらしいことは、『ドラ』ドラがミュンヒェンで初演されたのと同じ年に出版された歌集、『マルクスとエンゲルスの舌でもって』(Mit Marx-und Engelszungen)の中の『三十年目の清算のバラード』(Bilanzbalade im dreißigsten Jahr)の中に『Bürokratensau』とか『die fetten Landesvater』という言葉があることや、また同じ歌集の中の『ブラハのバリコムミュン』(In Prag ist Pariser Kommune)には『Büroelephanten』という言葉や、『俺たちはネズミや龍より強いんだ』という言葉があることでもはっきりしている。特に最後の引用文では官僚と龍が同じであることがわかる。この反官僚主義を問題設定の中心においたところにマルクス正統派を自認するドイツ統一社会党に対する批判が感じとられる。また同時に同じテーマでもって高度に管理された西側の体制にも一撃を加えることができ、シュヴァルツの主人公ランツェロットは英雄であるのに反して、ビーマンのそれは反英雄であるというのも大きな差異の一つである。ランツェロットというのはアルトゥス王の円卓の騎士である。

しかもシュヴァルツのこの本ではベルセウスや聖ゲオルクとの関係も言及されている。いずれも名高い龍退治の専門家である。それに反してビーマンの主人公はハンス・フォルクという名前である。ハンスというのは太郎にあたる平凡な名で、姓の方のフォルク(Folk)もフォルク(Volk)に通じ、大衆もしくは民衆を意味する。騎士であるランツェロットとは大きな身分の隔たりがある。そしてこの身分の違いが戦い方の違いにも現われてくる。ランツェロットは武器として隠れ蓑や空飛ぶ絨毯を持ち、龍と正々堂々と戦ってこれを倒す。しかるにフォルクの方は剣としてはうどん、盾としては木の枝で、はなはだ心もとない。そして人間からは卑しめられているいろいろな動物に助けられ、約束の戦いの場所で龍と対決することもなく、相手を呼び出した隙に相手の城に入り込んでしまう。他の龍の攻撃にも安全なように造られたこの城はこゝの住人である龍に対しても充分その役目を果たし、仕方なく龍は空から攻撃をしかけ、誤って尖塔に突き刺って死んでしまう。この反英雄的なゲリラ戦法は市民的で百姓的な龍退治の伝統に基づいていると思うが、上からの革命ではなく、下からの、それゆえ反英雄的な革命による社会主義建設、従って、非エリートによる革命が同時に暗示されているに違いない。またこれは個人崇拜、英雄崇拜に対する批判ともなっている。龍の死後、大衆は龍に代わる指導者を求め、知事に対してかつて龍に対してドラドラと愛称で呼んだように、グーグー(Gou-Gou)と呼びかける。この知事がフォルクによって打ち倒されると、市民たちは今度はフォルクに向かって「私たちのドラドラ」になつてくれるように哀願する。フォルクはこの申し出を拒否する。市民たちは全員龍に本来所属するものとして、サディストの知事が盛った毒入りブディン



グを食べて Drachensack の中で死んでいかねばならなかった。

また演劇手法としてはビーアマンの作品にはより新しい現代感覚が随所に見られる。この純粹に政治的で真剣な意図を持った作品に、サド・マゾ的要素、ドタバタ喜劇的要素がたっぷり入っている。プディングを投げつけたり、龍は毎日処女の小便を飲み物として運ばせているとか、龍も知事も性的能力に不安を感じたり、インポテンツであったり、また秘薬を使って巨大になった陰茎を性的快楽のあまりに知事は自ら切り取るとか、その傷口にターバンのように包帯を巻きつけたところ、それが新しいモードと早合点して、市民たちはカーテンで同じようなターバンを作り、腰に巻きつけたり、市民皆殺しのシーンや龍に殺害され、あるいは喰われた死体や骨の山などがその好例である。このようにしてこの政治劇は非条理演劇ないし残酷劇に近いものとなっている。このようないろいろな要素を含んだレビュー形式の演劇はブレヒトの『三文オペラ』や『マホニー』を思い出させるかも知れない。それにもまして目につくのは登場人物のあくことのない生命感情 (Vitalismus) である。龍のモチーフに付加されたヴィタールな肉付けはこの詩人の人生観、もしくは生感情の吐露であらう。

ランツェロットは旅から帰って来て市長を排除するのに反して、フォルクは知事に殺害されてしまうという筋の違いは、作品の中で改革が成就してしまっていると、観客の手にその成就が委ねられているの違いにあると思われる。一度死んだフォルクは動物たちが「生の根」を飲ませたので生き返える。そして龍の末裔たちを一掃するのだが、最後の筋に先行する次のような大バラードⅧを読むと、俺たちは龍から免がれたが、けれど

君たちはこの文句を知っているだろう。

「この腹はまだ孕むことがある。」

まだ龍の末裔は生きている。

まだ本当の解決がなされていないのがわかる。フォルクの行為はほんの第一歩で、残りの課題は観客に受け継がれる必要があると作家は要求しているのである。この開いた演劇形式も『ドラードラ』の特徴の一つである。

ビーアマンの『ドラードラ』は龍という怪物を使って、社会機構、政治体制といったものの分析を、お伽噺話や伝説などの長い伝統に基づいて戯画風に行っているが、同じように動物を登場させて社会分析をしている作品がブレヒトにないかと考えてみると、『コイナさん物語』(『Geschichten vom Herrn Keuner』)の中のショートストーリー (Kurzgeschichte) である『もしサメが人間であれば』に思いあたった。龍に対抗できるのはサメしかない。いわばゴジラとジョーズの対決である。ちなみにレックリングハオゼンの『龍』において、ランツェロットの戦いに、日本映画『ゴジラ』が使用されたという。ビーアマンとブレヒトの比較をする気にさせたのはこれだけではない。相方とも弾き語り (Liedermacher) であること、劇作品にソングやバラードを挿入したり、またバラードによる内容の先取りや、筋とは関係のない要素を入れることによる異化効果が見られること、フォルクスボエジーやモリタートなど、庶民的な芸術が強く影響を与えていること、社会主義に対する共感、文学による社会参加 (Engagement)、ヴィタリテートとゼクスアリテートの肯定、ボルノグラフィになる傾向、快楽主義、非条理演劇的手法などの共通点

が見られること、そしてなによりもビーアマン自身がプレヒトを高く評価して注目していたこと、また個人的にビーアマンを知っているロチルド (Rothschild) は彼に影響を与えた作家として、プレヒトを挙げていること、などもこの比較に踏み切らせた理由である。

サメモチーフとしては先きに見てきたように、龍モチーフのような大きな文字史での役割を果たしていないけれども、すくなくともプレヒトはこの動物に異常な関心を寄せていたことは確かである。もちろんその意味は時代が下るにつれて変化していくのだけれども、叙情詩にサメはしばしば登場してくる。プレヒトの叙情詩でサメが登場する一番最初のもものは、私の知る限りでは『家庭用説教集』("Hauspostille")の中の『船』("Das Schiff" 一九一九年)である。こゝでは主人公はサメに喰われて腐敗し、消滅してしまう。滅びへの共感というニヒリズムが前面に出ている。この海のメタファーはマルシュ (Marsch) によれば「孤独で滅亡に直面した個としての存在と一匹狼の生き方が示されている」のだという。また同じく『家庭用説教集』多くの船でのバラード ("Ballade auf vielen Schiffen" 一九二〇年)においては、難破して船が朽ちても船員は独りぼっちではないと歌われている。というのはサメがいつもそばについていてくれるから。食う者と食われる者との奇妙な一体感が感じとられる。こゝでも自己否定と虚無の肯定が強く表現されている。また同じく『家庭用説教集』の「あらゆる男の秘密について」のバラード ("Ballade von den Geheimnissen jedweden Mannes" 一九二〇年)では「動物たちはサメの目つきを見て青ざめる」という言葉がある。人間は腐敗していく憐れむべき存在であるが、他の人間にとっては同時に「人喰い」である。こゝではじめてサメモチーフ

が自己否定といった内へ向かうのではなく、対人関係、したがって外へ向かう意味づけがなされる。また『家庭用説教集』の『魚の支配者』("Der Herr der Fische" 一九二五年)では、魚の支配者、すなわちサメが弱小の魚を支配しており、サメは資本家であり、魚は労働者を意味することが暗示されている。この意味では『もしサメが人間であれば』と同じく、サメモチーフを使った社会批判に重点が移行している。一九二八年の有名な『三文オペラ』の中の『メッキ・メッサーのモリタート』("Die Moritat von Mackie Messer")には次のような歌詞がある。

そのサメは歯を持っており、  
その歯を顔の中に収めている。

(Und der Haifisch, der hat Zähne Und die trägt er im Gesicht)

山師の言葉 (Gaunersprache) である jiddisch の cheifez はヒモを意味し、この cheifez という単語がドイツ語のサメ (Haifisch) に入っており、また歯 (Zähne) というのもやはり jiddisch の sona という言葉がダブっており、これは売春婦もしくは娘を意味する。メッキ・メッサーの獐猛さが動物の比喩で表わされているが、その実こゝでは資本主義の搾取関係をヒモと娼婦の關係に置換した『三文オペラ』の主題そのものが表現されている。この方向、すなわち支配者と被支配者の關係が、食う者と食われる者との關係、すなわちサメと魚の關係に置換され、徹底的に、そして具体的に押しすすめていったのが『もしサメが人間であれば』である。初期にあっては自己崩壊、ニヒリズム、死の肯定としてのサメモチーフが、時代が下るにつれて、社会批判、階級意識の表現手段へと高められている。



『コイナさん物語』はその題が物語とはなっているが、ほとんどアフォリスムスといったものに近くなっている。ブレヒトがこの形式を持った『コイナさん物語』を非常に好んでいたことは、彼がほとんど一生を通じてそれを書き加え続けていたことから見てとれる。最初は『試み』(“Versuche”)の第一冊(一九三〇年)に発表され、続いて『試み』の第五冊(一九三二年)、『カレンダー物語』(“Kalendergeschichten”一九四九年)、『試み』の第十二冊(一九五三年)、『意味と形式』(“Sinn und Form”一九五七年)、『物語』(“Geschichten”一九六一年)、『散文』(“Prosa”一九六五年)にも散見される。この論文で取り扱っている『もしサメが人間であれば』は一九四九年の『カレンダー物語』の中で最初に発表されている。ブレヒトがこの作品に着手したのは何年と断定できる資料は手元ないけれども、内容からして、戦前、もしくは戦中のものと推測される。

ビーアマンの『ドラ』とブレヒトの『もしサメが人間であれば』を比較すると、多くの点で思想的に一致があるのに気付く。コイナはもしサメが人間なら、それは人間に対して親切であるという。ビーアマンは『ドラ』ドラが私たちを守り、私たちを愛し、私たちに役立ち、持っているものすべてを私たちに与える。父なるこの町のために<sup>105</sup>と書いている。またブレヒトはサメは他のサメと戦争するといえ、この世は龍で一ぱいだ、<sup>106</sup>しかも龍は他の龍と戦争するのだとビーアマンはいう。『彼らは戦争を自分の小魚たちにさせる』とブレヒトは毒づく。また被圧迫者同士の階級闘争については、ブレヒトは抑圧された魚は互いに反目し、戦い、互いに理解することもなし、大きな魚に小さな魚を食べさせると書いている。『ドラ』ドラでは、もう言及したように、中間搾取者である人間や被搾取者の

動物たちの中に、階級差や身分差が設けられている。また芸術に関しては、サメは芸術を愛し、非人間性をそれによって糊塗しようとしているのがわかる。一方龍は自分の周囲に詩人や哲学者を置いている。またプロバガンダによる洗脳についても両者は共に言及している。けれども相違点も存在する。例えばサメの腹の中に入って本当の生が始まるという宗教がいかに不合理で残酷なものかをブレヒトは書いているが、ビーアマンは余り宗教的なものには触れていない。これは宗教教育を強く受け、後にそれを否定せざるを得なかったブレヒトの問題意識のせいであろう。一番注目すべき差異は、すくなくともこれらの二つの作品に限っていうと、ブレヒトにあってはその根底に搾取関係の廃止、すなわち資本主義の否定とそれに代わる社会主義があるのに反して、ビーアマンにあっては、資本主義の否定で出現したスターリニズム、その克服としての社会主義という三つの世界が描かれている点である。これは第二次世界大戦以前の世界観と、大戦後のドイツ民主共和国成立後の世界観の違いを反映したものに他ならない。ファシズムの恐怖が目の前に存在していたドイツにとって、これを克服して登場してくる社会主義内部でのスターリニズム批判というのは、まだ論ずべきテーマではなかったのかも知れない。一九二九年から三一年にかけての教育劇の時代ではブレヒトは個人の党への絶対服従、集団の個人に対する優位というものを主張していた。けれどもこれはスターリニズムに対する無批判な態度と受けとられてもしかたがない。『もしサメが人間であれば』の中の世界観もこの延長上にあると考えられる。それに反してもうすでに社会主義が実現した国に住んでいたシュヴァルツは年代的にはブレヒトと変わらないにもかゝらず、より

鋭く社会主義を分析できる有利な立場にいた。この批判的な態度が  
ビーマンに受け継がれているのである。

注

- (1) Der Spiegel, 22. 11. 1976.
- (2) Frankfurter Allgemeine, 8. 5. 1978.
- (3) Rothschild, Thomas: Wolf Biermann, Liedermacher und Sozialist, Rowohlt, Hamburg 1976 の中 Heyme の見解参照。一六九ページ  
前掲書 一六九ページ以下
- (4) Deutsche Volkszeitung, 18. 5. 1978.
- (5) Saarbrücker Zeitung, 11. 5. 1978.
- (6) 白鳥 清『龍の形態に就いての考察』一九三四年東洋学報二二卷二号からの引用
- (7) 笹間良彦『龍——神秘と伝説の全容』一九七五年刀剣春秋新聞社四五ページ  
Hoffmann-Krayer, E.: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. II, Verlag de Gruyter, Berlin und Leipzig 1929/1930, S. 366.
- (8) エジプト神話での冥界を支配するワニのこと、注(10)も参照。
- (9) インドのナーガ神での蛇のこと。
- (10) 白鳥氏や出石氏は雨雲や竜巻に龍の起源を見ている。
- (11) 笹間氏は西アジアで龍が生まれたと主張している。前掲書 四六ページ以下
- (12) もともとナイル川に棲むワニから発生してきたのであろうが、聖書のレヴィアタンもワニと訳されることもあるし、ヨーロッパの龍はワニにその発生の起源を見ることができるので、このワニも広い意味で龍と考えてもよく、またトンブソン氏も『民間説話』(後出)の三五九ページでこの説を採用している。
- (13) 森 豊『龍——正倉院からの発見——シルクロード史考察二』一九七六年

- (14) 六興出版二二四ページ
- (15) Thompson, Smith: The folktales (1946)『民間説話(上下)』荒木・石原共訳一九七七年現代教養文庫(九三〇)五三ページ
- (16) 前掲書 五三ページ以下
- (17) 前掲書 六〇ページ
- (18) 前掲書 六三ページ
- (19) 森氏はこの見解をとっているが、トンブソン氏は断定を控えている。
- (20) 出石誠彦『龍の由来について』一九三〇年東洋学報一七卷二号二八三ページ
- (21) Biermann, Wolf: Der Dra-Dra, Die große Drachentoterschau, Klaus Wagenbach, Berlin 1970, S. 102.
- (22) Biermann, a. a. O., S. 102.
- (23) Schwarz, Jewgenij: Der Drache, Verlag der Autoren, F. a. M. 1978, S. 24.
- (24) Schwarz: a. a. O., S. 12.
- (25) Schwarz: a. a. O., S. 13.
- (26) Schwarz: a. a. O., S. 14.
- (27) Biermann: a. a. O., S. 81.
- (28) Biermann: a. a. O., S. 79 und S. 82.
- (29) Biermann: a. a. O., S. 82.
- (30) Mao, Tse-Tung: Ausgewählte Werke, Bd. IV, Verlag für fremdsprachige Literatur, Peking 1969, S. 303.
- (31) Hoffmann-Krayer: a. a. O., S. 373.
- (32) Biermann: a. a. O., S. 133.
- (33) Arnold, Heinz Ludwig: Wolf Biermann, Verlag edition text + kritik, München 1975, S. 11 以下 überscheinende Lebenszyklus が指摘やれづつ々。
- (34) Biermann: a. a. O., S. 127.
- (35) Deutsche Volkszeitung, 18. 5. 1978.



- (37) Neues Deutschland, 16. 12. 1965 では「オートマンの強度のバルノ的特徴が  
批判された。
- (38) Biermann: Die Drahtharfe, Klaus Wagenbach, Berlin 1965 とは "Herr  
Brecht" (1961) のことである。
- (39) Rothschild : a. a. O., S. 8.
- (40) Marsch, Edgar : Brecht-Kommentar zum lyrischen Werk, Winkler  
Verlag, München 1974, S. 121.
- (41) Brecht, Bertolt : Gesammelte Werke 8, Werkausgabe, edition  
suhrkamp, F. a. M. 1976, S. 219.
- (42) Marsch : a. a. O., S. 129.
- (43) Brecht : Gesammelte Werke 2, Werkausgabe, edition suhrkamp,  
F. a. M. 1976, S. 395
- (44) Unsere Zeitung, 3. 1978.
- (45) Biermann : Der Dra-Dra S. 19.
- (46) Brecht : Gesammelte Werke 12, Werkausgabe, edition suhrkamp,  
F. a. M. 1976, S. 395.
- (47) Biermann : a. a. O., S. 14.
- (48) Brecht : Gesammelte Werke 12, S. 395.